

( 続紙 1 )

京都大学	博士 ( 人間・環境学 )	氏名	西内 亮平
論文題目	宗教論と趣味論を中心としたヒューム啓蒙主義思想の包括的検討		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、近代イギリス経験論の代表的な哲学者の一人であるデイヴィッド・ヒュームの宗教論および趣味論を論じたものである。ヒューム哲学は、しばしばその認識論および道徳論に焦点が当てられやすいが、本論文において宗教論と趣味論に焦点を当てつつ、あらためてその重要性を浮かび上がらせようとするものである。特に啓蒙の時代において、その代表的な思想家であるヒュームの議論から、啓蒙の時代が内包する問題を啓蒙の内部からどのようにして超克する契機があるかを明らかにする手がかりを与えることを目的としている。</p> <p>以下で各章の要約を示す。</p> <p>本論文は大きく分けて二部からなる。第一章から第四章までを含む第一部においては、自然宗教をめぐるヒュームの議論が取り上げられ、第五章と第六章からなる第二部においては、人種主義およびその根底にある趣味論が取り上げられている。</p> <p>第一章は、論文全体の予備的考察として、ヒュームがその思想を形成する思想的背景が概観される。スコットランドにおいて、ニュートンをはじめとする自然学がどのようにして受容されてきたのかということが多くの文献を紐解きながら詳細に説明されている。</p> <p>第二章は、ニュートンをしばしば称賛し、ニュートンから影響を受けているヒュームと、ニュートンおよびボイルが、神学的な態度においてどのような関係にあるのかが考察される。ニュートンやボイルは、近代自然科学の偉大なる先駆者であると同時に、自然神学のみならず啓示宗教に対しても肯定的に捉えている一面を持っている。ヒュームは彼らの自然哲学における業績を高く評価しつつも、彼の議論は、暗にそういった彼が敬意を払う先人にも向けられていたことが、明らかにされる。</p> <p>第三章では、神の存在を示す議論として代表的な議論の一つであるデザイン論証をどのようにヒュームが扱ったかということが論じられる。デザイン論証とは、被造物、自然の精巧さなどからそれを設計した者の存在を導く論証であり、近代においてはウィリアム・ペイリーのものが名高い。ヒュームは、このようなデザイン論証を類推の妥当性を軸に批判するが、現代におけるより洗練された形のアブダクション型のデザイン論証であっても、ヒュームの議論の中で批判可能であることが示されている。</p> <p>第四章では、ヒューム哲学における神の観念が「自然信念」であるのかが論じられる。ケンプ・スミスによって導入されたこの「自然信念」という概念は、ヒューム哲学における単なる懐疑主義ではない自然主義的な思想を捉えるために導入されたものであり、デザイン論証による神の観念がこれに含まれるかという問題がヒューム研究者の間で取り上げられることになったが、本論では、このような論争に踏み込みつつ、ヒュームにおける神の観念が、このような自然信念であるということについては否定的な結論を導きつつも、一方で教育などによって育まれるものであり、それは人間本性に適った仕方でも獲得されるものである以上、ある種の自然性が見出されることが論じられている。</p>			

第五章では、ヒュームの人種主義についての主張が考察される。近代における懐疑主義の代表的な研究者であるポプキンによって、ヒュームにおいて人種主義的な主張が見出されることが注目されるようになった。ヒュームは、有色人種、黒人を劣ったものとして考えていたと理解され、そして大きな批判をされることになる。この章では、そのようなヒュームの人種主義が、どのようにして他の考えと関連し、どのような根拠を持つのかを、従来のヒューム研究者の主張を批判的に検討しつつ明らかにしたものである。そしてその根底には、ヒュームの趣味論・美学的批評についての考えがあり、それについて第六章へと接続されていく。

第六章では、第五章の議論を受けて、ヒュームの美学的批評と道徳的批評をつなぐ趣味判断について、それがどのような基準によってなされるのかということが検討されている。つまり趣味判断の相対性および多様性を認めつつ、それをそのまま良しとすることなく、いかにして権威を形作るべきなのかということ、ヒュームがどのようにして探っていたのかということが中心的なテーマとなる。相対主義におちいることなく、趣味判断の多様性の中で規範の存在を認め、それをどのように形作るのかというまさしく現代においても重要な問題の先駆的な議論を近代の啓蒙の時代に認める章となっている。

(論文審査の結果の要旨)

イギリス経験論を代表する哲学者として知られるデイヴィッド・ヒュームは、その徹底した経験主義によって、かつては懐疑論者として、そして現代では経験主義的な立場を経由した自然主義的な認識論を展開した哲学者として多くの注目を浴び続けている。わが国においては、特にその認識論および道徳論が中心的に研究されることの多いヒュームであるが、彼は宗教についても重要な主張をなしている。ただし、しばしばそれは当時のオーソドックスな宗教的な立場とは異なるものであり、彼が無神論者の疑いをかけられることによってグラスゴー大学におけるアダム・スミスの後任を得られなかったことは有名である。

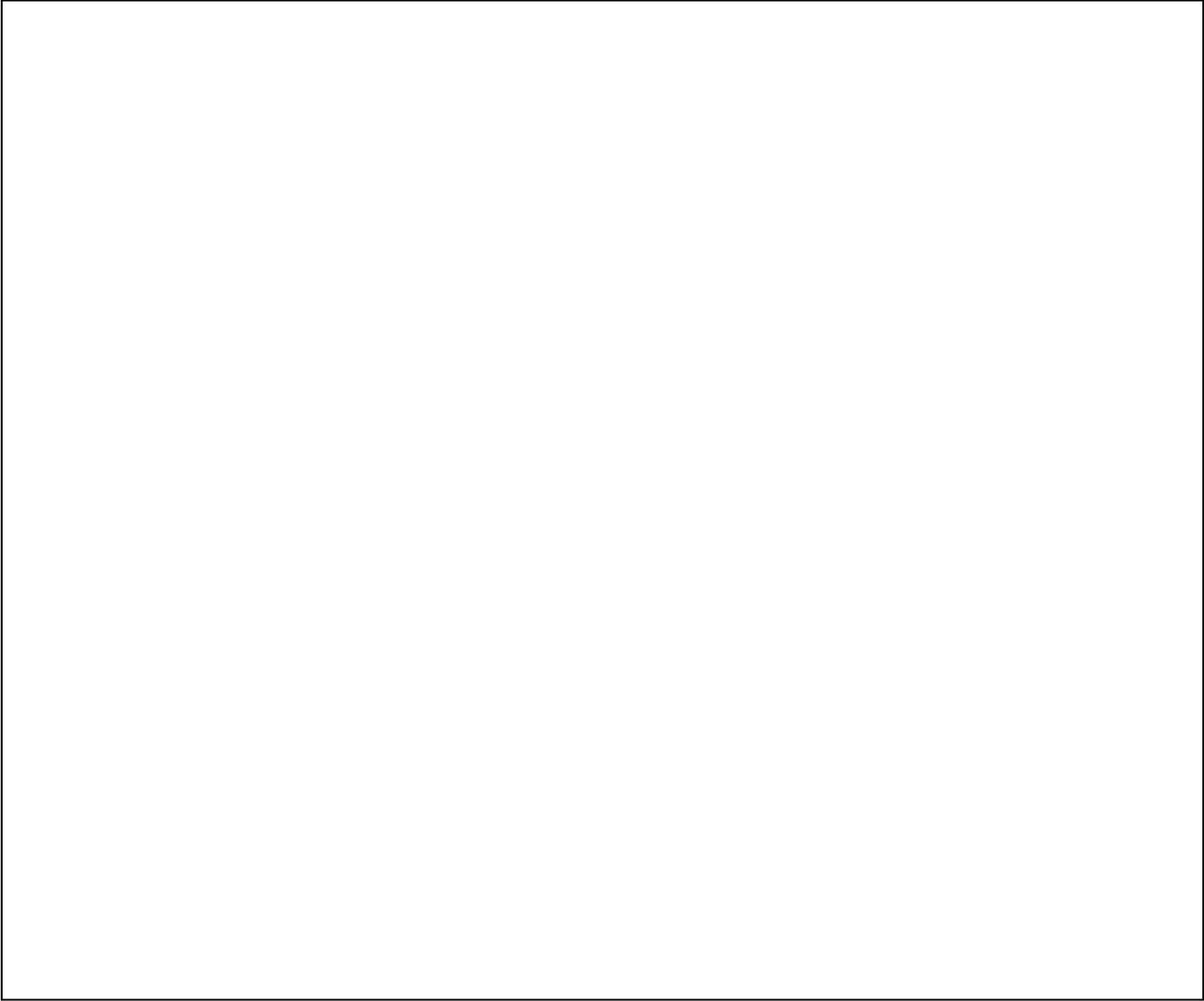
本論文は、啓蒙の時代に生きたヒュームが、自然主義からどのような方法論を受容し、そしてそれを用いつつ宗教論や趣味論をどのように展開したのかが検討される。全体として思想史としての側面が強く、ヒューム自身の主張の背景にある社会的・文化的な背景などが、詳細に研究され、肉付けされている。大きく分けて二部からなり、第一部はデザイン論証をはじめとする自然神学とヒュームがどのように向き合い、そしてそれをどのような仕方で再構築しようとしたかが論じられている。また第二部では、現代においてしばしば批判的となる彼の人種主義がどのようなものであるのかということが彼自身の立場に即して丁寧に整理され、さらに彼の人種主義の基準となる趣味判断についての議論を通して、多様性の中でどのようにして一定の核となる基準を見出すのかという問題が論じられる。各章の論述は明快であり、現代における宗教論、趣味論、倫理学などの議論に影響を与えた近代の一つの側面をより深く理解する資料を提供するものとして重要な研究成果とみなすことができる。

さらにそういった哲学史的な成果だけではなく、美的判断や道徳的判断において、多様性を認めることがたんなる相対主義に陥ることなく、一定の基準をどのようにして求めるのかという問題を考える手がかりを与えるという点で、現代における世界との関わりを考える上での手がかりを提供するという価値をも有するものとなっている。

ただし問題がないわけではない。思想史、哲学史としての側面が強いということの裏返しではあるが、そこで描かれる問題を申請者自身がどのように評価し、現代に生きるわれわれが歴史から何を学び、どのように現代に生かすのかという申請者の主義・主張がやや後背に隠れ、少しばかり物足りなさを感じさせるのも事実である。また簡潔で明瞭な論理展開の一方で、若干説明不足の箇所が散見される。ただし、質疑応答などによって調査委員から多くの質問を受けた際に、申請者はそういった問題点をある程度払拭することに成功したと言える。

よって、本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認められる。また、令和4年1月26日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、出版に差し障りがなくなるまで、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。



要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降